

医学教育研究成果（令和元年度）の概要報告書

令和2（2020）年 4月 30日

公益財団法人 医学教育振興財団 理事長 殿

研究代表者 高村 昭輝
大 学 名 金沢医科大学
職 名 准教授
氏 名 高村 昭輝

研究課題（和名）	能動学習方略を組み合わせた自己学習養成型・臨床実習前症候学診断学授業カリキュラム開発～事前学習・講義・SGD・ケースプレゼンテーション・シミュレーション・ポートフォリオの効果的組み合わせ～
研究課題（英名）	
研究期間	令和元年4月1日～令和2年3月31日
<p>研究の概要：</p> <p>本研究は 2018 年度から、医学部卒前教育において年々膨大となるコンテンツを教育するために時間的に効果的な学修方略が重要であり、PostCC-OSCE の本格導入により、臨床実習中から症候を主訴として受診する患者に対し、自ら推論を行う能力が必要となることを踏まえて企画された。特に症候学・診断学などの臨床医として核となる部分の教育は単なる講義形式による情報伝達ではなく、自ら学習し、診察所見から鑑別診断を挙げ、必要な検査を吟味し、診断を詰めていくという一連の過程で涵養される統合的能力が実臨床では必要となると考え、そのための授業構成を考えた。さらにその過程ではケースプレゼンテーション能力、他の医療者との協働、自己主導型学習という能力も同時に涵養されることが望ましい。その学修の成果はその後の臨床実習、初期研修でも活用できる形のものであることが望ましく、臨床実習前の症候学・診断学の学修カリキュラムを工夫し、様々な要素を絡め、能動的学修形態とすることで</p> <p>①症候から診断への統合的能力を涵養する ②他者と協働し、成果を産出する能力を涵養する ③学修成果として初学期に有用なポートフォリオを創造する ④これらの学修方略から授業では取り上げない症候に関しても自己主導型学習が進められる能力を涵養する…ことを目的として2年間にわたって以下の教育実践を行った。</p> <p>本学では第4学年の臨床実習前に3週間（正味15日間）の症候学・診断学の授業がカリキュラムとして組み込まれている。実際の授業の進め方として…</p> <p>①非常に重要な10～20症候を事前選定し、学生に提示する。 ②学年を20グループに分割し、1グループに1症候ずつ割り当てる。 ③割り当てられた症候で各グループが事前に模擬ケースを作成（フォーマットの大枠は提示し、完成まで適宜支援）する。 ④当日は1：事前学習評価のための症候プレテスト（全員対象）、2：担当模擬ケースプレゼンを行い、フロアとともに問答形式で診断を考察していく（教員はファシリテータとして参加）、3：その症候と診断のポイントを臨床診療科教授が50分で講義、4：学生はグループでその日の症候診断に関する自分教科書を作成し、自己学習分をさらに追加（イメージはその後の実習で活用できるもの）、5：イントラネットのマイページにアップし、eポートフォリオ兼教科書として保存し、アクセスできるようにする。 ⑤終了後に自分教科書とポートフォリオは学生評価としても使用し、さらに症候学・診断学ユニット試験、学生からの満足度調査、その後の臨床実習でどの程度、役立つかをフォローすることでこの学修カリキュラムの有用性を評価する。</p> <p>現在、新型コロナウイルスの影響により、Post CCS-OSCE の直前である新6学年の学生には5年次に上がるに行われたこの教育カリキュラムが有用であったかの調査を行うことができていない。しかし、前年度に行われた本年卒業した学生に行われたアンケート調査や提出されたポートフォリオでは重要な症候についての理解度は概ね良好で臨床実習中の学生からも4年次には理解できなかったものの単なる教科書を学習するだけではない今回のカリキュラムが実習において非常に有用であった旨の結果が出ている。助成金のおかげもあり、この2年間で概ね、症候学診断学授業コンテンツが確立したので今後も随時、見直しながら継続していく所存である。この結果は来年の日本医学教育学会で報告する予定にしている。</p>	